

「制作実習」—復習問題(18).doc <最終回>

氏名:

クラス:

★3rd 音の役割 (M3,m3)と変化形 (sus2,sus4) ~そして Hybrid の世界へ

やっぱり

古典和声の基本は3度堆積(コードバイサード)

で、

中でも 3rd 音はそのコードの性格を決定するメッチャ大事な音。

だからこそ、

その 3rd 音を上 sus4 (P4th)とか下 sus2 (M2nd) にずらすと、sus 音は本来の位置 M3rd,m3rd に戻ろうとする。

中でも、

sus 音が avoid の場合、その帰結性=戻りたい願望は最大になる。

Diatonic Chord において sus 音が avoid になるのは、この V sus4 と I sus4 の2種類しか無

in C: V sus4 V I sus4 I
C音がavoid F音がavoid

よって、

sus コードの中でも、V sus4 と I sus4 は特別重要な扱いになってる。

ってのが

コードルにおける sus コードの本質。

(ちなみに I M7sus4 だと 4th に対するタイトーンって一異常事態になるんで、四和音の基本はあくまでも V7sus4 ね)

sus2 (root に対しての M2nd) は avoid じゃない為、3rd への帰結性はそんなに強くないけど、それでもやっぱり、sus2 は 3rd に戻りたがる。

この2つが同じ構成音ってとこに注目

そして、sus2 コードは5度上=4度下の sus4 コードと構成音が同じ！

sus4 コードは4度上=5度下の sus2 コードと構成音が同じ！

ってことが重要。

Gsus4に見せといて実はCsus2

と、

ここまでのコードルな話しで、

sus コードってことは、3rd が無いってこと。ってことは、それを平行移動させれば omit3rd (無表情) っつーひとつの音色を動かすってことになる。ってことは、平行ハーモニー、音色の平行移動、これ、すなわちサンプリングミュージックだ。

で、これって、

なんか似てないか？

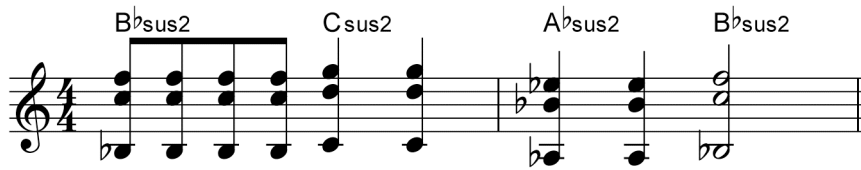
4th Interval Build Voicing での Melody Harmonize = Sectional Writing ね。その平行版 = 音色移動版。

◎4度堆積を M2nd で挟むとアンビエントな世界へ、m2nd で挟むとサスペンスな世界へ行ける。

◎5度堆積を M2nd で挟むとチルアウトな世界へ、m2nd で挟むとドクロな世界へ行ける。

これこそ Sus4 の拡大←モーダル界への拡張エンジンってことだ。

同じ理屈で Sus2 コードの Root をオクターブ下げて平行移動すると、
オリエンテリイな響きが……



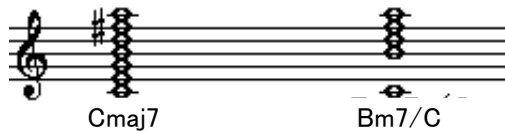
で、
これら sus コードの並行移動は、全て sus4 の拡大って解釈もできるし、さらに応用してけば、

- 3度のみの堆積→3度和音(コードバイサード)
- 4度のみの堆積→4度和音(コードバイフォース・フォースビルド)
- 2度&7度の堆積→2度和音(コードバイセカンド)
- 様々なインターバル→混成和音(ハイブリッド)

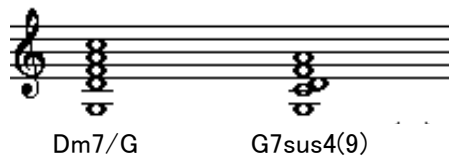
と、
結局は全部 Hybrid Chord に行き着いちゃう。

※3rd 抜き の 堆積 が Hybrid Chord って解釈する宗派もある

Hybrid Chord といえば、ふつーには、テンション含みのコードから 3rd(ついでに 5th も) 抜いちゃったやつのこと。Bm7/C になっても機能は C のまま、ってところがポイント。



有名なのは、やっぱこれ↓。上にサブドミナントがのっかってっても、やっぱし機能はドミナント。



:Hybrid Chord の危うい定義:

ザックリ言えば、「Hybrid Chord=3度の無い分数コード」となる。

U.S.T.の分母 chord の構成音のうち、分子 triad の構成音とは別のものを選んで、それを root にして、分子を再構成しちゃったモノ。

結果

ギリギリ機能を保ってた U.S.T.は Hybrid Chord に分解され、機能を失い、抽象的な unit に変身するけど、雰囲気は維持継続される。

手順としては

U.S.T.→ Chord Scale → Hybrid Chord

と3段階踏むことによって、

ひとつの U.S.T.から、複数の Hybrid Chord が抽出される。

重要なのは、そこに至った手順だけみたいなので、結果的にはただの on chord になったりもする。

そしてジミヘンが登場する。

例えばこうゆうコードだと解釈してみる→ D7(#9)omit5 F G

このコードは色々な解釈が出来る
よーするに
様々なスケールでアドリブが可能

ひとつ跨いでGへのドミナント
Fの変形としてのサブドミナント
Gのテンションだらけとしてのトニック

S D

上記の様に、“**D**の代理”とも“**S**の代理”とも“**T**の代理”とも、如何様にも解釈できるコードが出来上がる。
重要なのは、ファンクションの解釈によって、使えるスケールが変わってくるってこと。

※『めっちゃ不協和→協和』と解釈することにより、とにかくドミナントだと決め付けるのも OK。
これら解釈の拡大によって、

音色：ノイズ(D)→サイン波(T)

律動：ジャングルビート(D)→エイトビート(T)

等々、ドミナントモーションの解釈エントロピーは増幅しつづけるのだ！

そもそも僕は、

Mix＝楽曲を圧縮して音色を創る作業

作曲＝音色を拡張して楽曲を創る作業

だと思ってる。

よーするに、コードとは音色(に機能を付加したモノ)なのだ。それが、そもそもの原点。

[問1]音楽を創りなさい。

よーするに、

音楽理論とはそれぞれの民族が抱える宗教の仕組みのことであり、西欧音楽に置いては「キリスト教戒律」から「ポピュリズム」へと続く“遍歴を巡る実学的歴史物語”のことなのだ。文法と同じだね。

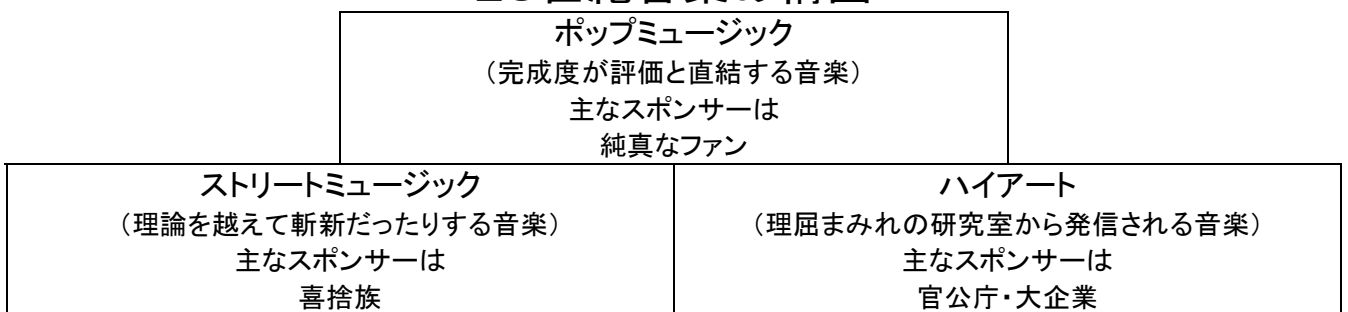
底なしに例外だらけの“文法”も、高度な合理性に基づいているものだ。無数の人間が磨きをかけることによって贅肉がそぎ落とされ無駄が省かれた、壮大で緻密なシステムなのだ。でもって、その合理性の中心にイメージ≒記憶がある。イメージというエンジンが、従来の「文法規則」が太刀打ちできないほど豊かで緻密なことばを支えているってこと。基本的な文法規則をマスターしたら、その先は、イメージとしての豊かさをそのまま吸収すること。これが最短距離であり合理的な方法なのだ。(どっかからの流用文ー思い出したら追記ー)

よって、

『“ポピュラー”音楽理論を学ぶ』＝『“最もゼニの匂いがする20世紀宗教”の構造を学ぶ』

そーゆーこと。

20世紀音楽の構図



※「ハイアート＝シリアスマジック→教会と宮廷に端を発す」

※「ストリートミュージック→アンダーグラウンド発」

技術の進歩により縦の繋がりから横の繋がりになってきた、と解釈する。

21世紀の音楽教はまた別の理論をベースとする。既に機能と声や平均律を超越した音楽スタイルがポップミュージックの主流になりつつもあるし、そもそもコードが進行する(コーダルな)音楽全般は人気を失いつつある。

但し、新たなスタイルに確信を持って素早く対応する為には、20世紀教の構造を学ぶことが必須であり、手っ取り早い近道でもあるのだ。

学習中の理論が「絶対(普遍)では無い＝永遠にポピュラリティを持ち続ける訳は無い」ということを常に意識する為、歴史上の立ち位置(現在地)を確認することはメチャ重要。それが勉強ってことだ！

[問3]音楽を創りなさい。